

氏名・(本籍地)	横山裕明(東京都)
学位の種類	博士(仏教学)
学位記の番号	甲第106号
学位授与の日付	平成28年3月15日
学位論文題目	<i>Dākinīvajrapañjara</i> の文献学的研究
論文審査委員	主査 野口圭也
	副査 種村隆元
	副査 高橋尚夫

横山 裕明 氏 学位請求論文審査報告書

「*Dākinīvajrapañjara* の文献学的研究」

論文の内容の要旨

本博士論文は、後期インド密教の聖典の中で、無上瑜伽・母タントラに分類されている『ダーキニーヴァジュラパンジャラ (*Dākinīvajrapañjara*・以下VP)』を主たる研究対象としている。この文献は、サンスクリット語写本が現在のところ確認されておらず、チベット語訳のみが現存している。本論文では、8種のチベット語訳諸版本・写本を対照して校合テキストを作成して読解を進めた。さらに諸本とは訳者が異なるプタク写本とも対比して、読みの違いを検討した。VPには、4本の注釈書が存在するが、本論文ではその中から特に、サンスクリット語写本の存在する、『マハーマティ注』と作者不明の『ティッパティ (*Tippati*)』の2本を用いて、写本から注釈のサンスクリット語テキストを作成し、VP本文のサンスクリット語原文をも復元することを試みている。これらの作業の成果は、本文中に適宜紹介される他に、付録として末尾にまとめて付されている。

VPは、母タントラ文献の中で最も重要な『ヘーヴァジュラタントラ (*Hevajratantra*・以下HV)』と関係が深く、チベットの伝統に従えばHVの略タントラあるいは釈タントラと位置づけられている。先行研究においては、

現在一般的に『ヘーヴァジュラタントラ』と呼ばれている『ドヴィカルパ (Dvikalpa・以下DK)』も含めて、主としてマンダラの構成から、これらの経典の成立過程について論じられている。本論文でもVPとHVの関係に着目し、HVとVP、さらにDKをも含めて、初期母タントラの形成過程を考察している。

VPの内容分析は第2章・第3章で述べられている。まず全15章からなるVP全体の構成を概観し、VPのマンダラを構成する五族の主尊である五仏が、VPにおいては様々な異名で呼ばれていることを明らかにした。さらに、母タントラの灌頂の大きな特徴である第四灌頂がVPでは明確に説かれていないこと、後期密教において悉地を獲得する際の兆候とされる五相がVPとDKでは全く異なっていることを示した。次にVP全体の中で最も重要と見られるのは第一章であることから、その内容について注釈を参照しながら、VP第一章を「序文」「5つのマンダラ」「ヨーガの理論」の三部に分けて詳述している。ここでVP第一章のサンスクリット原文の復元を試みている。

第4章では、VP自身によるタントラ分類法を説いたうえで、「五十万頌・三十儀軌のHVからの抽出」と自らを規定するVPにおいて説かれる、伝説的な広本HVの五十万頌の内訳および三十儀軌のそれぞれの名称を明らかにする。これは他のタントラには見られない、極めて貴重な情報である。特に最初の2つの儀軌名は、現存するDKの二つの儀軌の名称と同一である。

第5章では結論として、VPの記述に依拠しながら、HV・DKとVPとの関係について、次のような分析を行っている。五十万頌・三十儀軌という広本のHVは架空であるとしても、VPの成立時点においては何らかの形でHVの原初形態が存在していたが、それは先行する父タントラ的な要素も保持するものであった。しかしそこに女性尊を主体とする母タントラ(VPでは「ヨーギニータントラ」と呼ばれる)への転換が起こり、VPはそれに基づいて成立した。このため、VPには女性尊を主とするマンダラが説かれる一方、第四灌頂などの母(ヨーギニー)タントラを特徴付ける諸要素が欠け、逆に十忿怒尊のような父タントラ的な要素もまた見られることとなった。これに対してDKは、完全に純化したヨーギニータントラである。そしてVPとDKの両者とも、ヨーギニータントラへと転換した原初形態のHVより別々に展開したものと結論づけている。

審査結果の要旨

文献学、特に梵文学関係の博士論文としては、原典の校訂テキストの作成、その近代語への翻訳、それに基づく当該文献の内容分析、という3点すべてが不可欠である。また先行研究を網羅的に収集し、その内容を十分に把握したう

えで、先行研究の問題点と不十分点を指摘し、文献の正確な読解に基づいて、自らの新しい見解を述べることも当然ながら要求される。

本論文においては、原典校合テキストの作成は、入手できる限りのチベット語訳資料8本を用いて行い、さらに異訳の写本をも対象とし、サンスクリット語写本の現存する2種の注釈書は、かなり読みにくい単独写本を読解してテキストを提出した。これらは世界で初めて行われた作業であり、先行研究で用いられていたVPのテキストに比して、格段に信頼度が高いテキストに基づく分析を可能にしたことは、高く評価することができる。翻訳については、VPや注釈の全文訳が提出されている訳ではないが、本文中で取り上げたVPはすべて和訳が付されており、注釈も適切に参照されている。しかしながら訳文は完璧にはほど遠く、改善の余地を大いに残している。これは今後の研鑽を待つこととしたい。また付録として末尾に多くの原文資料を挙げているが、付録においても本文中と同様に原文テキストに和訳を付していれば、より読みやすくなったと思われる。

本論文では、VPが純然たる母タントラ（ヨーギニータントラ）であるDKのように第四灌頂やタントラ的身体論といった母タントラに特徴的な教理を説かないこと、父タントラ（ヨーガタントラ）の特徴である十忿怒尊がマンダラに配置されることなどを根拠として、母タントラとしての発展はDKほどに進んでいない、とする。しかし灌頂の記述を見ると第四灌頂に相当する内容が説かれているのではないかと、との指摘がなされた。これに対しては、第四灌頂を表す有名な句である“*caturtham tat punas tathā*”が見られないことから、やはり第四灌頂は説かれていない、と判断している。しかしより詳細な検討が必要である。またDKの2つの儀軌名が、VPの挙げるHV三十儀軌の冒頭の2儀軌に一致することから、VPに先行してDKは成立していたのではないかと、との指摘があった。これもまた議論の余地が残るところである。さらに、VPとDKとの共通母体に相当する、HVの原初形態という文献を想定する必要性についても問題とされた。この点に対しては、VPとDKには、ヘールカ9尊マンダラとナーイラートミヤー15尊マンダラという母タントラを代表する2種のマンダラが共に説かれていながら、それ以外の要素には共通点よりも相違点が多いことから、共通の母体を持ちながらも別個に発展した経典と認めることができる、とした。

VPの内容には父タントラ的な要素と母タントラ的な要素が併せ見られる。さらにマンダラには、恐らくVPに先行する『サマーヨーガタントラ (*Sarvabuddhasamāyogatantra*)』との共通性が見られると同時に、DKとも共通するマンダラが説かれている。HVの30の儀軌名や五十万頌の内訳を述べていることも、VPの特徴である。VPに見られるこれらの諸点をすべて矛盾無

く説明することはかなりの困難を伴う。著者の提示した分析によって完全に解明できたとまでは言えないにせよ、より正確なVP本文と注釈書に基づいた分析であるため、その信頼性は高いと言える。

本論文には、審査の過程で提出された上記の疑問点や、原文からの和訳の不十分さが見られるのであるが、母タントラにおける重要な経典として先行研究で触れられていながら、全体像の解明がなされていなかったVPを主題とし、多くの版本と写本を用いてチベット語校合テキストの作成を行ったこと、および、サンスクリット語写本を用いて注釈書のテキストを作成して経典のサンスクリット復元と内容理解のための有益な資料を提出したことは、本論文の第一の重要な成果であり、学会に寄与するところも極めて大きい。VP・HV・DKの成立過程に関しては、先行研究を踏まえて錯綜する記述を整理して分析を行い、新たな解釈を導き出した。このように本論文は、提出したテキストの有用性と共に分析内容の独創性も高く、後期インド密教の研究の進展に大いに貢献するもので、高く評価できる。よって、本論文は学位請求論文として合格に値すると認められる。